
黒崎新一の推理日誌

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒崎新一の推理日誌

【Z-コード】

N7468A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

黒崎が行くとこで度々起る事件。そして・・・。
切り

掲載打ち

プロローグ

最近の日本はやたらと事件がある事件大国だ。この間だつて秋田で子供が二人殺されている。
世の中どうなつてしまつたのだろう。
これは、そんな世の中に産まれた一人の男の物語である。

第1話：誕生パーティ殺人事件

俺の名は黒崎 新一。

東京の公立高校に通うごく普通高校生だ。

高校では水嶋 ヒロに似てるって事でかなりモテる。

それから、俺には双子の妹がいる。

名は黒崎 紗。

紗は、しっかり者で頼れる存在だ。
しかし、怒るとかなり怖い。

「何してるの？」

と、篠原 愛美に似て可愛い少女が俺に声を掛けた。
彼女が妹の紗だ。

コイツとはクラスが一緒だ。

「何してるって、読者に俺やお前の事を紹介してたんだ。」

「読者って？」

「あ、今のは気にしないでくれ。」

危ない危ない。

「そんな事より、真理絵ちゃんが新一に話しがあるって。」

真理絵が？

一体、どんな用だろう？

俺は、真理絵に会った。

「新一君、来てくれたんだ。」

と、飯田 里穂に似て可愛い少女が言った。

彼女が真理絵だ。

フルネームは奥村 真理絵。

学校での評判はかなり良い。

「それで、話しつてのは？」

俺は真理絵に聞いた。

真理絵は、

「あのね、明日のお毎に中学の時の友達の誕生会があつて、それに招待されてる。」

「それで？」

「招待された人や、友達は彼氏がいるの。

しかも、皆彼氏を連れてくるみたいでさ。

だけど、私にはいないから・・・。

だから、一日だけ私の彼氏になつてくれない？

「何で？」

「いないならいないつてハツキリ言えば良いだろ。」「いるって言つちやつたんだ。今更言えないよ。」

と、涙ぐむ真理絵。

「そう言つ事なら・・・。」

と、俺は一日だけ真理絵の彼氏を勤める事にした。

「じゃあ、10時に私の家に来て。」

真理絵は、10時に家に来る様に言つた。

俺は、

「解つた。」

と言つて、真理絵と別れた。

自宅に帰ると、

「真理絵ちゃんの話つて何だつたの？」

と、綾が聞いてきたので俺は、

「お前には関係無い。」

と言つて、部屋に入つてベッドに横になつた。

そして翌日、俺は約束通り10時に真理絵の自宅に行つた。

すると、真理絵が玄関先で待つていた。

「あ、待つてたんだ。中にも良かつたのに。」

「いや、新一君と何処か行くの初めてだつたからつに嬉しくてね。」「はあ？」

「そんな事より早く行きましょ。」

そう言つて、真理絵は俺の手を繋いで歩き出す。

俺は赤くなりながらも一緒に歩く。

「な、なあ・・・恥ずかしいから放してくれないか?」

「あ、ごめんなさい!つい癖で。」

と、真理絵は手を放す。

癖つて・・・どんな癖なんだ、おい。

今時手繋いで歩く女子高生なんかいないぞ?いや、カップルならい

るか。

「所で、お友達の家は近くなのか?」

俺は真理絵に聞いた。

「うん。」

と、真理絵は頷き、

「あそこ。」

と、正面の門付きの大きな豪邸を指差した。

それはまるで、ドラえもんの骨川スネオの家を思わせる程の家だつた。

「ま、マジであそこなのか!?」

俺が聞くと真理絵は、

「うん。」

と、頷いた。

ははん、随分とお金持ちな家庭だこと。

門の前に来ると、俺はインターホンを探した。

しかし、インターホンが見当たらない。

「インターホンなら中に入つた所だよ。」

と、真理絵。

成る程、いくら探しても見付からない訳だ。

俺達は門を通り、中に入つて玄関の前に立つた。

扉の横にはインターホンがある。

真理絵は、インターホンを押した。

ピーンポーン

と、音が鳴る。

すると、

「はい。」

と、インター ホンから声がする。

家の主が応答したのだ。

「奥村です。」

と、真理絵。

「あ、真理絵ちゃん。

ちょっと待つて。」

と、主。

それから暫くすると、扉が開いて主が出てきた。

その主は、新穂えりかにそつくりで可愛かった。

俺はその可愛さに一目惚れをしそうだったが、必死にそれを堪えた。

真理絵は主に、

「彼氏の黒崎新一。」

と、俺を紹介した。

「始めてまして。川口咲樹です。」

と、主。

彼女が今宵の物語に重要な人物だ。

川口は、

「どうぞ。」

と、中に入る様促した。

俺と真理絵は、

「お邪魔します。」

と言つて中に入った。

中に入ると、正面に真っ直ぐな通路があり、左右に扉がある。

更に通路を進むと、リビングに出れる様になっているのが玄関からハツキリ見える。

また、その途中には、上に行く為の階段がある。

「じゃあ、上に上がりましょう。皆待つてますから。」

と、川口は言つて、通路を進むと階段を昇つて行った。

俺達は川口から離れない様に付いて歩いた。

階段を登り終えると、左右に道が分かれていた。

川口は、

「 ひつちよ。」

と、右に曲がり、正面の扉を開けた。

扉の向こうは部屋になつており、人を押し込めば20人は入るスペースだつた。

「お邪魔します。」

と言つて、俺と真理絵は部屋に入る。

すると、

「 真理絵、久しぶり。」

と、一人の女が真理絵に話し掛けた。

女の子は、橋本 甜歌にそつくりで可愛かつた。

彼女の名は、望田 真子。

望田は、真理絵の中学校の頃の同級生だ。

自慢じやないが、高校ではかなりモテているとの事。

そしてその右隣にいるのが、汀 浩一と言つ望田の彼氏である。

汀は、堂本 剛に似ていて格好いい。

因みに、マジックが得意。将来はマジシャンになるのが夢なんだと
か。

堂本 剛似マジシャン登場か？

更に、その右隣にはメガネを掛けたデブ男がいた。

男の名は、小田 国男。

小田は、その名の通りオタクである。

因みに、川口の事が好きらしいが、川口は全く気にしていない。
そして隣には、佐藤祐基に似た国枝 浩と言う男がいた。

コイツは、俺の中学の時のパシリで、高校が川口と一緒にらしい。
また、川口とは交際中だ。

「 お、黒崎じやねえか。」

と、国枝。

「おめえ、何時から俺の事呼び捨てる様になつたんだ？ああ！？」

「何だよ、悪いか？」

国枝は、そう言って眼を飛ばして來た。

すると、

「浩、やめなさい。」

と、川口。

「すいませんでした。」

国枝は川口に謝った。

俺はそれを見て、

「成る程、ツンデレか。」

と、言つてしまつた。

「何！？」

と、国枝は立ち上がり、

「もう一つ言つてみろ！」

と言つて、俺の胸倉を掴む。

俺はそれに対し、

「やめとけ。お前は俺には勝てない。」

と言つて国枝に背負い投げをした。

その瞬間、国枝は背中を床に叩き付けられ、それを見ていた奴らが俺に拍手をする。

「あの、拍手貰つても嬉しくないんですけど……。」

と、俺はそいつらに言つた。

すると、そいつらが拍手をやめ、部屋中シーンとなつた。

川口は、

「あ、あたし、ジース持つて来るね。」

と言つて、場を和ませた。

俺は、

「手伝うよ。」

と言つて、川口と一緒に部屋を出た。

部屋を出ると、

「あの、何か空氣悪くして御免な。」
と、俺は川口に謝った。

川口は、

「あ、その事なら気にしないで下さい。悪いのは浩の方なんですか
ら。」

と、俺に書つ。

「こや、いつもおじやないんだ。」

「へ？」

と、田を志にする川口。

「俺・・・自分で空氣悪くして、そんでもうござるのが苦手なんだ
よ。」

俺は川口に書つた。

川口は、

「やうなんですか？」

と、俺に聞く。

「ああ。小さい頃からやうなんだ。」

「大変ですね。」

所で、本当はどうなんですか？」

「何が？」

と、俺は聞く。

川口は、

「真理絵ちゃんとの事ですよ。」

黒崎さん、本当は真理絵ちゃんの彼氏じゃないんでしょ？」
と、唐突に聞いて来た。

鋭いなコイツ。

そう思つた俺は、

「うん。」

と、答えた。

「じゃあ何で彼氏だなんて？」

「それは、真理絵に頼まれたからだよ。」

「頼まれた？」

と、川口が聞いて来た。

俺はその経緯を川口に語った。

「あの子らしいですね。」

と、川口。

そんな事を話している間に、俺達はリビングにやって來た。

川口は、

「付いて来て。」

と、俺を誘う。

川口に付いて行くと、俺はキッチンへとやって來た。

「ほお。リビングとキッチンが一緒になってるのか。」

俺は一人呟く。

すると、

「グーウ」

と言ひ音が、どこからか聞こえて來た。

「あ、いけない。」

と、川口が顔を赤くしながら言った。

それに対しても俺は、

「気にする事無いよ。」

お皿、まだなんでしょう？」

と、川口に聞く。

川口は、

「うふ。と聞ひか、皿も食べて無いと思つ。」

と、言つた。

「わつか。なら俺が腕を降るつてびつかり美味しい料理を作つてやろう。」

「えー? そんな事しなくても私がやりますから良いですよ。」

「いや、良いくて。これは俺からの誕生日プレゼントだ。君は上で待つててよ。」

多分、30分くらいで出来るから、そしたら吾を連れて来てよ。

俺はそう言って、川口を一階に帰した。

さて、何を作るか・・・。

俺は、野菜室を開け、適当に材料を出した。

と言つても、出て来たのはタマネギ3個だけである。

3個か・・・。俺を入れて7人だから、ちよつときついな。

そう思いながらも、俺はタマネギの皮を剥き、上下を切り落とした。後はチキンブイヨンにオリーブオイル、梅干し2個に出し昆布一枚と塩小さじ1／2、きぬさや10枚。

俺はそれらをキッチンをあさりながら探した。その結果、案外早く見つかった。

「よし。」

俺はそう呟くと、圧力鍋を棚から取った。此処からが本番。

俺は、梅干しを微塵切りにすると、きぬさや以外の材料を梅干しの種ごと入れて水で15分程煮た。

そして、俺は菜箸でタマネギをつついた。すると、タマネギに箸がすっと通る。

「このぐらいか。」

そう呟いた俺は、きぬさやから筋を取り、それを加えてさつと煮て、最後に塩こしょうで味付けをして終了。

完璧だ。

俺は皿を用意し、タマネギを半分に切つて皿に盛り、皆が来るのを待つ事10分。

皆がリビングへと集まって来て、「美味しそうな臭いがするわ。」

とか、

「良い臭い。」

とか騒ぎ出した。

俺は皆に、

「取つたらリビング中央のテーブルに持つて。」
と、言つ。

すると、国枝、真理絵、望田、汀、小田の順に俺の作った料理を持つてテーブルに向かつたが、川口だけが残つて、
「一人分足りませんよ？」

と、俺に言つ。

俺は、

「タマネギが3個しか無くてね。」

と言つと、

「私と半分個しましょう。」

と、川口が言つた。

「え？ でもそれじゃあ君の食べる分が少なく。」

「良いんです。私、ダイエット中ですから。」

そう言つて、川口はタマネギを半分にし、片方を皿の上に載せてテーブルに持つていった。

ありがとう・・・。

俺はそう思いながら、自分の分の皿を持ってテーブルに着いた。
すると、

「これ、黒崎さんが作つたんですか？」

と、望田が言い、

「男で料理だなんて凄いわ。」

と、真理絵が言つた。

「ふつ、騒ぐのは食べてからにしてくれ。」

俺が皆にそつと言つと、皆は俺の作った料理を一口食べ、

「美味しい！」

と、皆が同時に言つ。

「こんなのは、生まれて初めてだ。」

と、小田。

それに続き、

「お袋でもこんなのは作れないぜ。」

と、汀。

「これ、何て言つ料理なんですか？」

と、望田。

「タマネギのポツタラ煮だ。」

俺はそう答えた。

それから暫くすると、俺を含め、全員がポツタラ煮を完食。

「『』ちりそつをまでした。」

と、皆が言つ。

すると、急に川口が立ち上がり、

「うつ・・・うつ・・・うつ。」

と、首を押されて苦しんだかと思つと、その場に倒れてしまった。

「咲樹ちゃん大丈夫！？」

と、言いながら、小田が川口を揺らす。

「触るな！」

と、俺が小田に怒鳴ると、小田は川口から手を放した。
俺は川口の様子を確認した。

すると、川口の口元からアーモンドの臭いがした。

と言つ事は、青酸力リだろう・・・。

「新一君、咲樹どうしちやつたの！？」

と、真理絵。

「死んだ・・・。」

俺はそう呟いた。

「咲樹ちゃんが！？」

と、小田が言つと、皆が一斉に俺を睨む。

「俺・・・疑われてます？」

俺がそう聞くと、

「うん。」

と、皆が頷き、

「貴方が作った料理を食べたからこうなったのよ。
貴方、咲樹の料理に毒を混ぜたんじゃないの！？」

と、望田。

「ちょ、ちょと待て！確かに作ったのは俺だ。でも、毒なんか盛つてはいない。

それに、もし毒を盛つてたら俺も死んでつからな。」

と、反論する俺。

「どういう事？」

と、真理絵。

「半分個・・・川口さん・・・人数分足りないって、俺と半分個にしてるんだ。

勿論、半分個にしたのは川口さん本人だ。」

「でもでも、その後に毒を盛る事は可能だよね。ほら、君は咲樹ちゃんの隣に座つたし。」

と、小田が言つ。

「そうだそうだ。」

と、汀。

それに続き、

「黒崎。お前といつ奴は！？」

と、国枝が言い、俺の胸倉を掴む。

「待て国枝。そう言うお前はどうなんだ？」

俺が聞くと国枝は、

「俺はやつてねえよ！」

と、俺を突き放す。

「ま、取り敢えず、警察呼んでくれないか真理絵。」

俺は真理絵にそう言つ。

真理絵は、携帯を取り出すと、110番に電話を掛けた。

それから暫くすると、一人の刑事と鑑識、監察医が川口家に入ってきた。

「警視庁捜査一課の桑田だ。」

と言つて、桑田刑事は警察手帳を見せ、

「話を聞かせて貰おう。」

と、付け足す。

すると、

「「こつだ。こつが咲樹ひやんに毒を盛つたんだー。」

と、小田が俺を指差して言つ。

桑田刑事は、

「ん？」

と、鼻を鳴りしながら俺を見る。

「おや？ 黒崎君じゃないか。」

と、桑田刑事。

「黒崎さんを知つてるんですか？」

と、望田。

それに対し、

「知つてるも何も、こりひじや有名な探偵だよ。」

と、桑田刑事が言つ。

「探偵ですか？」

と、望田。

「嘘だろ？。」

と、小田。

「刑事さん・・・俺は探偵じやなくて、探偵の兄。何勘違いしちゃつてんですかー？」

「ああ、そعدつたな。」

と、笑いながら言つ桑田刑事。

「何だよ。びつくつ揃じやねえか。」

と、国枝。

「いや、揃じやないと困つよ。」

と、望田。

「何で？」

「ここいらで有名な探偵と言つたら、女子高生の黒崎綾さんでしょ？」

その兄つて事だけでもかなりびつくりだよ。」

と、汀。

「あ、そつか。」

と、国枝。

その割には驚いてないがな。

と、頭の中でツツコミをする俺。

「まあ、兎に角、これから事情聴取をするんで、一人ずつ順番に話をしてくれ。」

桑田刑事はそう言った。

俺は、面倒な事になつたなと思いつながら、両手をズボンのポケットに入れた。

すると、右のポケットに瓶の様な物が入つていた。

「何だ？」

俺はそう咳き、それを出した。

取りだした瓶には粉末が入つてあり、

「potassium cyanide」

と、側面に書いてあつた。

シアノ化カリウム・・・何でもこんなものが俺のポケットに？

「ねえ、それって薬じやないの？」

と、真理絵。

「ちょっと見せてみる。」

と、桑田刑事は取り上げる。

「！」これは！？

黒崎君、何処にあつたんだね？」

「ズボンのポケットに。」

俺は桑田刑事にそう言った。

すると、

「やつぱりお前じやねえかよ。」

と、国枝が言い、俺の胸倉を掴んだ。

「ちょ、ちょっと待てって！それは俺じやない！

誰かが勝手に入れ・・・はつー」

「どうしたんだ？」

と、桑田刑事。

「解つたんですよ。俺のポケットに瓶を入れた人物がね。」

「何？他にいると言うのか？」

と言つて、国枝は俺の胸倉を放した。

「ああ・・・だが、証拠が無い。」

俺がそう言つと、

「証拠は無くても良い。誰がポケットに入れたんだ？」

と、桑田刑事が聞く。

俺は、ゆっくり手を擧げると、国枝を指差した。

「ちょ、ちょつと待て黒崎！俺が咲樹を殺したって言うのか！？」

俺はそう聞く国枝に対し、

「川口さんを殺したのはお前じゃない。」

と、腕を組みながら言つた。

「ちょ、ちょつと待ち賜え黒崎君。

君のポケットに青酸カリの瓶を入れたのが彼で、犯人が他にいるつてどういう事だね？」

「無理なんですよ。コイツに青酸カリを盛るのは。」

「どうして無理なんだね？」

「料理を持つて行つた順番です。」

国枝は、一番最初に料理を持つて席に着いた。だからコイツが毒を盛る事は不可能です。」

と、俺は国枝に毒を盛るチャンスが無かつた事を話した。

「じゃあその次だ。」

と、桑田刑事。

「それも無理ですよ。」

容疑者は俺を含めて7人です。
考へてもみて下さい。

先ず、料理を持つて行つた順番は、国枝、真理絵、望田、汀、小田。

そして、最後に被害者の川口さんと俺。

「料理を作つたのは？」

「俺です。でも、」の時に川口さんの食事に毒は盛られていませんよ。」

「どうして解るんだね？」

「そうしたら俺も死んでるからです。」

「どういう事だね？」

と、桑田刑事は聞く。

「人数分足りなくて俺と半分個にしてるんですよ。勿論、半分にしたのは彼女だ。」

その後に彼女はテーブルに着いたんです。その間、俺は彼女の料理には触っていません。」

「他に触れた奴は？」

他に触れた奴か・・・。

確かに、川口さんが載せた皿に小田が触れていたな・・・。
と、俺は皆が料理を取つて行つた時の事を思い出した。

「ま、まさか・・・。」

と、俺は呟いてしまつた。

「どうしたんだね！？」

と、聞く桑田刑事。

「ちょっと気になる事がありましてね。」

国枝、この青酸カリ、誰かに渡されたとかしなかつたか？」

俺がそう聞くと、国枝は俺の耳元で、

「小田とか言うメガネデブに渡されたんだよ。」

と、囁いた。

「それ本当か？」

「ああ。そんで俺、怖くなつて、あんたのポケットに入れたんだ。」

「入れたのは何時だ？」

「咲樹が死んで、俺があんたの胸倉を掴んだ時だよ。成る程、そう言つ事か。」

「桑田刑事。」

「何だね？」

「そこにいるメガネを掛けた如何にもオタクっぽいトブの小田が犯人だ。逮捕しろ。」

俺がそう言ひと、小田は慌てて逃げ出した。

「待て！」

と、桑田刑事が追う。

「くそつ、捕まつてたまるかよ！」

小田はそう言ひと、その場にずつ転けてしまつた。

何とも哀れな。

桑田刑事は、その隙に小田に手錠を掛けた。

「署まで来い。」

そう言ひと、桑田刑事は小田を連れて行つた。

後日、小田は桑田刑事に酷く殴られ、全てを自供したと言ひ。

何はともあれ、こうして事件は解決をし、幕を閉じた。

が、真理絵がおこおいと二日三晩泣き続けたのは言ひまでも無かつた。

「解つたからもう泣くなつて。」

と、俺は真理絵に言つたが、泣きやむ事は無かつた。

やれやれ、こりや暫く泣きやみそつも無いな・・・。

そう思つた俺は、放つて置く事にした。

「じゃあ俺は帰るからな。」

そう言つて、俺は真理絵と別れると、一人家路に着いた。

第1話：誕生パーティ殺人事件（後書き）

まあ、最初はこんなもんです。

第2話：帰り道の殺人！（事件編）

「なあ黒崎。七不思議って知ってるか？」

唐突に、隣の席に座っていた亀山 大輝と言つ男が話し掛けて來た。彼は、サングラスを掛け、派手な服装をし、教師に隠れてコソコソタバコを吸つている不良だ。俺はそいつに知らないと答えた。

「なら教えてやろう。」

と、亀山は答える。

「教えてくれなくて結構。」

俺はそう言い放つと、推理小説を取りだして読み始めた。するとどうだらうか？

亀山が急に怒つて、

「てめえ、俺が折角教えてやるうと言つてゐるのに嫌だと言つのか！？」

と、言った。

そんな亀山に対して、

「お前、そんなに話たいのか？」

だつたら、聞いてやらない事も無いが・・・。

と、俺は本を読みながら答えた。

亀山は突然立ち上がり、

「コノヤロー！」

と、殴りかかつて來た。

危険を感じた俺は咄嗟に避け、腕を掴んで放り投げてやつた。

亀山はそのおかげで背中を酷く床に叩き付けてしまつた。

「あ、今のは正当防衛だから、悪く思うな。」

亀山は起きあがると、逃げながら言つた。

「畜生！覚えてろ！」

「無理！」

俺はそう言つて見送つてやつた。

「もう、新一ったら。何度言えば解るの？」
と、ふくれながら綾が言った。

「な、何だよ？何かしたか俺？」

「私、何時も言つてるよね？亀山君を虐めないでって。」

「お前なあ・・・あんな不良になんか関わるなよ。」

「パシッ！」

綾が俺の頬をビンタした。

「ああ見えても亀山君はとても良い人なのよ！？
なのに不良ってのは無いんじゃない！？不良ってのは！？」

俺は溜め息を吐く。

「お前が亀山を好きなのは良いけど、あんな奴と一緒にいたつてろ
くな事にはならねえぞ。」

「パシッ！パシッ！パシッ！パシーン！」

綾が往復ビンタをした。

「もう知らない！」

綾はそう言つて、泣きながら教室を出て行ってしまった。

「何だよ、あいつ・・・。」

俺は誰もいない教室で、窓の外を見ながら一人呟いた。

「おーい、新一くん。」

偶々通りかかった真理絵が廊下で俺を呼んだ。

俺は廊下に出ると、真理絵を見つめた。

「どうした？何か用か？」

「いや、別に用つて程じゃないんだけど、暇だつたら一緒に帰ろう
かなつて。」

真理絵はもじもじしながら言つた。

成る程、そう言つ事か。

真理絵の気持ちを察した俺は、

「良いよ。俺も今、一緒に帰ろうと思つてた所だ。
と、思つてもい無い事を言つた。」

「本当！？じゃあ帰りの支度して来る！」

真理絵はそう言つて、はしゃぎながら教室に戻り、帰りの支度をして戻ってきた。

俺は机に置きっぱなしにしてあつた小説を鞄にしまい、帰りの支度をすると、真理絵と共に下校を始めた。

「昨日の新一君、とても格好良かつたよ。」

突然、真理絵が昨日の事を口にした。

昨日の事と言えばあれだ。真理絵の友達の家で起つた殺人事件。あの時、犯人を追いつめたのはとても愉快だった。

「新一君つて凄いよね。

頭良いし、格好いいし。

それに比べて私なんか、バカでブスで何の取り柄も無い・・・。」

待て待て。何を言い出すんだコイツは？

「そ、そんな事無えって。

真理絵は可愛いし、頭もそれなりにキレる。学校での評判もいいと聞くぞ？」

「でも、新一君には敵わないよ。」

「人間はな、レベルや見た目じゃないんだ。その人の中身、個性が大事なんだ。

要するに、俺が言いたいのは、人を見た目で判断するな、と言う事だ。

「俺、何人生論述べてんだろう？」

「ねえ、あれ見て！」

突然、真理絵がある方向を指差しながら叫んだ。

「どうした？」

「あそこ、人が倒れてる！」

人が倒れてる？

俺は真理絵が指差す方向を目で追つた。

そこには、男の人気が頭から血を流して倒れているのが見えた。

俺達は様子を見に男の下へ駆け寄つた。

男は、既に息絶えていた。

左に階段か。

俺は階段を見上げた。

「誰だ！？」

俺は逃げ去った人影に言った。

「待て！」

俺は慌てて階段を上つて人影を追つたが、途中で見失ってしまった。

クソッ！仕方がない、戻るか・・・。

俺は男の倒れていた場所へと戻つた。

現場には、一人の刑事っぽい男の姿があつた。

「君が、犯人を追つたと言う少年だね？」

一人の刑事っぽい男が俺に声を掛けた。

「そうですけど。」

「それで、犯人はどうした？」

「途中で見失いました。」

「そうか。」

所で、犯人の顔は？特徴とか無かつたかね？」

「いいえ。暗かつたし、慌てていたもんですから、特徴なんてそんな。」

「そうか。」

じゃあ、もう帰つて良いぞ。後はこちらでやるから。」

「あの、警察手帳とか見せてくれないんですか？」

「ああ、すまん。今日は非番で持つて来て無いんだ。」

怪しい。この人、かなり怪しい。

「真理絵、帰ろうか。」

俺は怪しまれない様に、真理絵と共に男から離れ、こつそりと男の様子を確認した。

思つた通りだ。

男が被害者の持ち物を持って行きやがつた。

第3話：帰り道の殺人！（解決編）

「帰り道、俺と真理絵は殺人の現場を目撃した。
「行っちゃったよ。どうするの？」

「取り敢えず、警察だろ。」

俺は携帯を出して警察を呼んだ。

警察が到着するまで、やれる事があるな。

俺は被害者を調べた。その結果、出て来たものは、財布、タバコ、ライター、免許証、キーケースの五つ。キーケースには、複数のキーがあつた。この他にも何か持っていたと思われるが、恐らくさつきの男が持つて行つてしまつたのだろう。

程なくして、警察が到着した。

「警視庁の桑田だ・・・って、またアンタか！？」

「いけませんか？」

「いや、別にいけないとは・・・。そんな事より、遺体には触れてないだろうな？」

そう言つた桑田だが、当の俺は遺体に触れていた。

「成る程。階段から落ちて即死つて訳か。

亡くなつたのは、今から5分前だ。丁度、俺達が通りかかつた時刻と一緒だな。と言う事は、17：25か・・・。」

「そうか・・・って、遺体に触れるな！」

桑田は怒鳴つた。

「刑事さん・・・怒ると寿命縮みますよ？」

俺は振り向き、そう言つた。

桑田は、俺の発言で暗くなつてしまつた。

仕方がない。

「刑事さん。」

無視・・・。

「俺、犯人見ました。」

「何！？」

と、桑田は話に食いつき、

「どんな人物だね！？」

と、怒鳴る様に聞いた。

「まあ、刑事さん。先ずは、落ちつきましょう。」

「すまん。それで、どんな人物なんだね？」

俺は先ほどの事を思い出し、

「刑事っぽい男で、自分で刑事だと黙っていました。

その男、離れた所で様子を窺つていたら、被害者の持ち物を持ち去つたんです。」

と、桑田に話した。

「それで、他に気になる事は無かつたかね？」

「気になると言うか、被害者を殺害して逃げる男を見ました。途中で見失いましたけど・・・。」

「関係者は一人いるのか？」

「多分、そうだと思います。」

刑事は黙り込み、何かを考え始めた。
その間、俺は被害者の免許証を見た。
免許証には、小島 明と書かれていた。

「ん、小島 明？」

桑田が後ろで声を漏らした。

俺は桑田に向き、

「知ってるんですか？」

と、訊ねた。

「ああ。そいつ、昨日、うちの署に来たんだ。」

「何の用で？」

「命を狙われてるから助けてくれって。」

「命を狙われてる？誰に？」

よし、少し整理してみるか。

先ず、亡くなつたのは、小島 明。

死因は、後頭部損傷によるもの。

逃げる男と、刑事を名乗る男がいる事から見て、小島さんは何者かに狙われていたと考えるのが妥当だろう。

「刑事さん。」

「何だね？」

「今すぐ被害者の交友関係洗つて下さい。」

「それなら昨日、被害者が言つていた、3人の怪しい人物を呼ぼう。

「怪しい人物？」

「ああ。昨日、被害者とあつた時、その怪しい人物の事を聞かされたんだ。

「ま、ちょっと待つておれ。」

そう言つて、桑田は、その3人の怪しい人物を素早く現場に集めた。

よし、先ずは、あの女性から話を聞こう。

俺は、増村 澄子ますむら すみこと言つ、ロングヘアでメガネを掛けた若い女性に声を掛けた。

「早速ですが、貴女のアリバイを聞きたいと思います。

17：30頃、貴女は何処にいましたか？」

「私は、ピアノのお稽古に行つておりまして、少し前に帰つて来た頃です。」

「何時頃ですか？」

「えーと・・・。」

増村は時計を確認した。

「30分程前よ。」

30分前か・・・。今は、18：00だから、彼女が本当にお稽古に行つっていたのなら、アリバイは成立だな。

よし、次はあの人にするか。

俺は増村に会釈をした後、久山 隆くやま たかしと言つ小柄な男性に声を掛けた。

「俺かい？」

俺は、一昨日から友達と登山に行つていて、さつき帰つて来たんだ。

そうだ、これ、余っちゃったんだけど、良かつたら食べる？」

そう言つて、久山はチョコレートを出し、パキッと割つて俺に渡した。

「あ、どうも……」

俺はチョコレートを受け取り、会釈をすると、たかやま高山 浩介ひろすけと言つて被

害者の親戚に話を掛けた。

「僕は会社にいたよ。」

「そうですか……。」

俺は高山に会釈をすると、桑田の前に戻つた。

「何か解つたかね？」

と、桑田。

「解りましたよ、ハツキリとね。」

けど、刑事を名乗つた人はいませんでした。」

「そうか。で、犯人は？」

「あの人ですよ。」

俺は久山を指差した。

桑田は久山を呼んだ。

「何でしようか？」

「久山さん、小島さんを殺害した犯人は、貴方ですね。」

「ちょ、ちょっと待つて下さいよ刑事さん。」

僕にはちゃんとアリバイがある！」

と、久山は犯行を否定する。

「ほお。だが、この子が貴方を犯人だと言つています。」

久山は俺を横目で見るところ言つた。

「刑事さんはこんな餓鬼の言つことを間に受けんですか？」

俺はその発言を聞いてブチギレた。

「久山さん、7月の季節は？」

「夏？」

「そう。貴方はこの暑い季節に登山へ行つた。こんな暑い季節に登

山へ行けば、溶けるもの溶けてしまつ。
しかし、何故、持つて帰つて来たチヨコレートは溶けていないんで
しょうか？

まるで、たつた今、コンビニで買つて来た様な。」「
そう言つて、俺はチヨコレートを久山に見せ付けた。

「貴方は自ら犯人だと証明してしまつたのです。」

久山は、逃げ場は無いと見たのか、その場に膝を付いて泣き出した。
「全て、全てあいつが悪いんです。

1年前、付き合つていた彼女を、あいつに取られ。
僕、それを昨日、初めて知つたんです。

だから、今日、現場に呼び出して、彼を殺害しました。」「

「その時、逃げたのが貴方ですね？」

「え？ 何を言つてるんだい？」

僕は、逃げる所は誰にも見られて無いですよ？」「
どういう事だろ？

俺と桑田は顔を合わせた。

「ま、まあ、兎に角、署に来てじっくり話を聞こい。」「

そう言つて、桑田は久山に手錠を掛け、署まで連行した。

その後、警察の捜査により、現場から逃げる不審人物が発見された。
その不審な人物は、あの現場で俺が目についた警察を名乗る男で、た
だの探偵だったそつだ。

探偵が言つには、自分が犯人だと疑われ掛けたので、一旦現場を離
れ、再び戻つて依頼料を持ち去つたと言つ事だ。
全く、金にがめつい探偵がいるとは・・・。

第4話・氷が語る眞実

俺は今、真理絵と共に料理教室に来ている。

「それじゃあ今日は、ケーキを作りたいと思います。」

と、小島 美幸と言うショートヘアの美人な女性が言った。

小島は、此処のお料理教室の先生であり、中学時代の俺の担任でもある。

因みに、彼女は誰にでも人気があり、本気で交際を求めたがる者がいるぐらいの美人だ。

が、実は既婚者で子持ちなのである。

「新一君、卵持つて来た？」

「卵？」

「新一君、もしかして、忘れたの！？」

「ちょっと待つて。

それは俺が言いたい。

昨日、真理絵が持つてくるって決めなかつたか？

「そだつけ？」

目を点にする真理絵。

「あらあら、どうしたのですか？」

と、小島が間に割つて入つた。

「真理絵が卵を忘れて困っているんだ。」

「そう。それなら、冷蔵庫から取つて来るわ。」

そう言つて、小島は教室を出て行つた。

「全く・・・毎回毎回、お前と言つ奴は・・・呆れてものも言えんわ。」

「「めん・・・」

俯く真理絵。

「はい、お待たせ。」

小島が卵を持つてやつて來た。

小島は、卵を置くと、笑顔でこう言つた。

「今度は忘れないでね。」

その時の笑顔は、とても美しかつた。

が、それが小島の、最後の笑顔となるとは、この時はまだ知るよしも無かつた。

バチン！

いきなり停電が起き、部屋中が真っ暗になつた。

「俺、ブレー カー見てくる。」

そう言い残し、俺はブレー カーを見に行つた。

「任せたわ。」

小島はそう言つて、俺を見送つた。

「あつたあつた。」

俺は呟きながらブレー カーのスイッチをあげた。

「キヤアアアア！」

突然、教室の方から悲鳴が聞こえた。

俺は急いで教室に戻つた。

「何があつた！？」

教室に入ると、俺は叫んだ。

「せつ、先生が何者かに！」

と、一人の女性が言つた。

俺は小島の下へ駆け寄つた。

「せ、先生！？」

俺は小島を見て驚いた。

背中に包丁が刺さつてゐる。息はしていない。

「誰か！救急車だ！」

と、傍にいた男性が叫んだ。

「いや、呼ぶのは、警察だけだ！」

教室にいる数人の顔が固まつた。

皆、小島が亡くなつた事に驚いてゐる様だ。

「あ、私、警察呼んでくる。」

そう言い残し、真理絵は近くの交番まで駆けて行つた。

さて、警察が来るまでに出来る事は、と・・・。

俺は、教室にいる数人に話を聞いて回る事にした。

一人目は、日系中国人の喜屋武 瑞璃。

学校は違うが、俺と同じ高校生だ。

喜屋武 瑞璃の証言では、停電直後、包丁が刺さる様な音が聞こえたらしい。

二人目は、会社員の山本 耕二。

山本 耕一もまた、喜屋武 瑞璃と同じ事を証言した。

三人目は、女子大生の九条 小百合。

九条 小百合も、他の二人と同じ事を証言した。

四人目は、ケーキ屋さんでアルバイトをしている香山 恭子。

香山 恭子は、何者かが小島を刺殺して逃げ去るのを目撃した、と証言した。

そして、最後に、警察を呼びに行つた奥村 真理絵だ。

彼女の話は帰つてきてから聞く事にしよう。

因みに俺には、ブレーカーを入れに行つた、と言う立派なアリバイがある。

「新一君、連れてきたよ。」

真理絵が、老警官の銀治郎さんを負ぶつて教室に入つて來た。

「彼だけ？」

真理絵は、頷くと、こう言った。

「駐在所には、このお爺さんしかいなくて、仕方ないから連れてきた。

た。

「これ、人を老人扱いするな！」

ポカッ！

老警官は、真理絵の頭を軽く叩いた。

「痛つ！」

真理絵は涙した。

「それより黒崎君、今度はどんな事件かね？」

と、その前に、わしを降ろしてくれんかの？「おばさん？」

おばさん・・・銀さん、あんたの命、多分無いわ。

「お、おばさん？」

真理絵は、顔を引きつらせながら笑い、手をポキポキと鳴らした。

真理絵の全身から殺意が漂つてくる。

「どりやーー！」

真理絵が銀さんを投げ飛ばし、落ちる前に回し蹴りを放った。

「どわ！」

銀さんはボールの様に飛び、壁に当たつて落下した。

「銀さん、大丈夫？」

俺は心配して声を掛けた。

「だ、大丈夫じゃ。」

銀さんは立ち上がって言つた。

皆、夢じゃないかと、頬をつまみ出した。

「で、どんな事件だね？」

「見ての通り、女性が背中を刺されての死亡です。」

俺は銀さんに遺体を見せる。

「ほほー。」

銀さんは、遺体を見ると目を丸くした。

「背後から敵を襲つてますなあー。」

「さつきから言つただろ！

あんたが来る前に、事情聴取とか終わらせたから、あんたは犯人逮捕するだけで良いよ。」

「つまらんのー。」

銀さんは落ち込んだ。

「新一君、落ち込んじゃつたよ？」

「気にするな。

それより真理絵、今トイレに行つた香山さんと、田をどりつしたのか聞いて来てくれないか？」

「解つた、聞いて来る。」

「

そう言つて、真理絵は香山さんの後を追つた。

さて、その間に俺は、ブレークーを見に行くか。

大体見当の付いている俺は、ブレークーを見に行つた。

ブレークーのある部屋は、洗面台があり、その上にブレークーが設置されている。

他にも、温水器やお風呂、その他色々。

つまり、この教室は、小島の自宅を兼ねているのである。

「何も無いか・・・」

俺はブレークーを見て呟いた。

ブレークーに仕掛けがしてあつたんじやないかと思ったんだが、見当ハズレだつたか。

待てよ？あれを使えば。

俺は閃き、洗面台の物入れを開け、中から工具を取りだした。よし、此処を回せば外れる！

俺は排水孔のネジを回し、鉄のパイプを外した。

思つた通り、中にゴム付きの重りが入つてやがる。

間違いない、犯人はあの人だ。

俺は中の物を出し、パイプを戻して現場へと戻つた。

「新一君、何処行つてたの？」

真理絵が声を掛けた。

「ちよつとな。それより、香山さんの目は何だつた？」

「物貰いだつて。」

成る程、だから香山さんは目にアイマスクを。

「ありがとな真理絵。おかげで犯人が解つたぜ。」

そう言つと、現場にいる全員を、俺に注目させた。

「黒崎さん、犯人が解つたんですか！？」

と、喜屋武 瑠璃が驚いた。

他にも、山本 耕二や九条 小百合も同じ様に驚いた。

「それで、犯人は誰よ？」

香山 恭子が聞いて来た。

「その前に、停電のトリックからお話ししましょう。」

「停電のトリック？」

銀さんが疑問の表情を浮かべて聞いた。

「先ず、最初に、こうこう物を用意しておきます。」

俺は例のゴム付きの重りを取りだした。

「えっと、これはゴムの先端に輪っかを作り、反対側に重りを付けた物です。」

これを、ブレーカーのスイッチに吊り下げて、第一段階は終了です。次に、洗面台の排水孔に氷でフタをし、重りを乗せます。

洗面台はブレーカーからほぼ一直線の為、氷が溶ければ自動的に重りが排水孔に落ち、重さに耐えきれなくなつてブレーカーが落ちると言つ寸法です。」

「待つて、それじゃあゴムはどうするの？」

真理絵がそう言つた。

「それは簡単だ。ゴムの弾力により、輪っかがブレーカーから外れ、そのまま排水孔に入り込む。」

香山 恭子は、納得すると、こう言つた。

「それなら内部にいる人にも犯行は可能だわ！」

「香山さん、その目、どうしました？」

「あ、これ？」

ちょっと、物貰いが出来ちゃつて。」

香山 恭子はそう言つた。

その発言に対し、俺はニヤリと笑つた。

「わ、私が物貰いになつた事がそんなに可笑しい訳！？」

キレる香山 恭子。

「違うんですよ、香山さん。」

「じゃあ何よ！？」

「いやね、目の前にいる犯人を追いつめるのが楽しくてね・・・。」

「そう、香山さん、犯人は貴方です！」

俺が格好良く人差し指で香山 恭子を差すと、周囲の人々が驚いた。

「そ、そんな！？」

「香山さんが！？」

「う、嘘だよね、新一君？」

「嘘じやない。

香山さん、貴方、本当は物貰いになんかなつてないんじゃないですか？

貴方は、暗闇でも微かに目が見える様にと、わざと正面にアイマスクをしているんじゃないんですか？」

一時の沈黙が終わると、香山 恭子がグラグラと笑い出した。

「面白い推理だわ。でもね、犯人は私じやないわ。

それに、言つたでしょ、犯人が逃げる所を見た、と。

「おかしいですね。

貴方が犯人で無いのなら、見える筈が無いんですよ。

犯行当時、現場は暗闇だつた。よほど日が慣れていない限り、犯人が刺殺して逃げるのは、暗闇では見ることが出来ないんですよ。」「ぐつ！」

香山 恭子は、その場にしゃがみ込む様にして泣き出した。

「あ、あいつが悪いのよ。あいつが、私の彼を奪つて、結婚なんかするから。

昨日、彼女にその事を聞かされたわ。それで、私、私。

うわあああん！私、先生殺しちゃつたよー！うわあああああん！」

香山 恭子は、犯行を認めると、喉が枯れるまで泣き続けた。

「ぐすんっ！」

「香山さん、もう泣かない。

後は警察で、ゆっくり罪を償つて、やり直しましょつよ。貴方にはまだ先があるんですから。」

俺がそう言つと、銀さんは手錠を掛けて連行した。

男女関係のトラブル。それだけの事で殺人とは・・・。
やるせないな。

第4話・氷が語る真実（後書き）

真理絵から一言。

この話を読んでる皆は、人殺しなんかしかや駄目だぞ。くだらない事で、人を殺したら、その先の人生を棒に振るだけ。明るく、前向きに生きよう

それと、今回のトリックにはちょっと無理があり、失敗しやすいです。

第5話・スペードは語る（事件編）

放課後・・・。

「もうやつてらんないわ！」

いきなり、ぶちギレた真理絵。

「な、何怒つてんだよ、奥村？」

お前が悪いんだろ？ 明田が本番だつて書ひの上、台詞を全く覚えないとだから。」

「中村、それ以上言うな。」

中村 浩介。
なかむら こうすけ。

彼は、明日行われる文化祭の催し物、“スペードは語る”と書ひの推理劇の監督だ。

「黒崎、お前は口出しするな。」

今日といつ今日は許してはおけない。絶対に覚えて帰つて貰うぞ、奥村！」

「（ああ、まずこよ。お前、絶対殺される。）」

そう、真理絵がキレると、ムカ付く奴は確実にのします。一度、真理絵に殺され掛けた俺が言うんだから間違い無い。そう思ったのも束の間。

「文句があんならてめえでやれ！」

「ズガーン！」

真理絵が中村の顔面を殴つた。

「おぶつ！？」

顔面が潰れ、彼はひょこがピヨピヨと頭を回転し、そのまま倒れてしまった。

「（中村さん、『』臨終です。）」

そつ思つた時、俺と真理絵の目が合つた。

真理絵は、俺を見ると微笑み、耳元でこつ囁いた。

「もつと、殴らせて。」

おーおいおいおい、まずいぞこいつや！

中村、早く目を覚ませ！

つて、そう言つ問題じやない。

「ま、真理絵、取り敢えず落ちつけ！」

俺は半分怯えながら言つた。

「嫌。」

「ズガーン！」

真理絵は、いきなり、俺の腹を殴つた。

「ヒューン！」

俺はもの凄いスピードで、壁に向かつて飛んでいく。

「コトン！」

足を付け、壁を蹴つた。

「ドフイーン！」

俺の体は真理絵を田掛けて飛んでいく。
が、真理絵は素早く避けた。

「ズドーン！」

床に突つ込む俺。

「し、新一君、何やつてるの？」

真理絵がとぼけた顔で言つた。

「何してるつて、お前に・・・。」

「ズシンッ！」

俺が途中まで言つと、真理絵が足で俺の背中を踏みつけた。

「（こつてえええええ！）」

俺は心の中で叫ぶ。

「新一君、自分からやって来て、人の所為にしちゃ、駄目よ。」

「はい、すいませんでした。」

俺は取り敢えず真理絵に謝つた。

全く、この調子で明日の本番は大丈夫なのだろうか？

そう思いつつ、時間は刻一刻と時を刻み、遂に本番当日へ。

「真理絵、台詞覚えて来たか？」

俺は体育館のステージの脇で聞いた。

因みに、この場所は、観客席からは壁が邪魔で中の様子が見えない。

「大丈夫、任せといて。」

「本当だろうな？」

ピンピンした中村が突然現れて聞いた。

「中村君、私を誰だと思ってるの？」

私は、世界一天才な美少女よ？」

「待て、世界一天才は俺だ。お前は世界一だ。」

俺はすかさずツッコミを入れた。

「どっちでも良いけど、お前天才なのか？黒崎ならともかく、暴力魔のお前が。」

中村が言つた瞬間、真理絵の強烈な回し蹴りが炸裂した。

「ドフォーン！」

中村がもの凄いスピードで、壁に向かつて飛んでいった。

「バキ！」

壁にめり込む中村。

「あんな奴、放つておいて早くやりましょ？」

真理絵は中村をアウトオブ眼中。

放置してしまつた。

「真理絵、せめて助けて・・・。」

「ズシンッ！」

真理絵のパンチが腹に決まる。

「貴方も、壁にめり込む？」

俺は直ぐに後ろへ退き、土下座をして謝った。

「真理絵様、すいませんでした。」

惨めだ、俺が惨めに見えるぞ。

「きやあああああああ！」

突然、観客席から女性の悲鳴が聞こえた。
その悲鳴は、異常だつた。

俺は直ぐにそこへ向かつた。

「何があつたんです？」

「カンちゃんが、カンちゃんが刺されてるんです。」

女性はカンちゃんとやらにしがみついたまま言った。

「離れて！」

俺はカンちゃんとやらから、女性を離した。

カンちゃんとやらは、胸にナイフを刺されて倒れていた。

「亡くなってる。」

脈をはかった俺は、思わず叫んだ。

「（ん、何だこれ？）」

俺は被害者に手に、スペードのトランプが握られている事に気が付いた。

スペードのトランプ、一体何を意味するのだろうか？

第6話・スペードは語る（解決編）

学園祭当日、本番を前にして殺人事件が起つた。被害者は、胸をナイフで一突きされ、死亡していた。手には、スペードのカードが。

これは一体、何を意味するのだろうか？

「何あんたが此処にいるんだ！？」

桑田はそうとうキレていた。理由は解らない。兎に角キレているのだ。

「こには、俺の学校ですが・・・。
で、警部、何でキレてんですか？」

俺は恐る恐る聞いた。

「休暇を利用して女房と旅行に行つたら、事件で呼び出されてムカムカしてるんだ！」

「それは、御愁傷様・・・。」

「こなつたからには、あんたの責任だ！30分以内に解決しろ！」
桑田は無理なお願いをして来た。

「そ、それは、いくらなんでも、無理かと・・・。
てか何で俺！？」

「いいや、お前なら出来る」と言つて、発見者を含めたら人の容疑者を集めて来た！話を聞いて解決しろ。」

理由は答えねえのかよ！？

「いやいや、容疑者だけ呼ばれても・・・。
本当にその通りである。

「すまん、被害者の身元がまだだつたな。
警部はそう言つて、警察手帳を取りだした。

桑田の記録によると、被害者は、神谷 霧子38歳。

職業はマジシャン。

本日は、姪の神谷 かみや 竹子が活躍をする舞台を見る為にやって來た。

死因は、心臓に刃物が刺さってしまった事によるショック死。遺体の状況から、死後数分と見られる。

死亡推定時刻は、午前10：00頃。

第一発見者の証言によると、体育館に入つて来た時には、既に倒れていたらしい。

また、当時の現場は、朝方の為か、来客が少なかつた。当然、この状況なら、誰にも気付かれずに殺害が出来る。そして、問題の5人の容疑者。

この5人を紹介しよう。

一人目は、元自衛隊の小島 隆38歳。

神谷 霧子の友人で、息子の活躍を見に来た。

因みに、今は普通のサラリーマンである。

アリバイは無い。

二人目は、狩屋 貴之40歳。

彼には色々と謎が多い為、桑田が容疑者として連れてきた。

神谷の元恋人。

アリバイは無い。

三人目、黒田 伸介40歳。

本日は弟の活躍を見に来た。

職業は無職。

神谷の元夫で、口論をしている所を田撃されている。

アリバイは無い。

四人目は、浅間 拓也38歳。

神谷と同じマジシャンで双子の兄妹だ。

姪の活躍を見に来た。

アリバイは無い。

そして、最後に、第一発見者の小玉 哀20歳。

彼女のアリバイは、桑田の後輩刑事の必死な捜査で裏が取れている。
「桑田くーん・・・全員アリバイ無いじゃないですかあ・・・。
俺はわざと顔を引きつらせながら低い声で言った。

「そ、そんな事言われても・・・」

桑田は小さく呟いた。

「ま、良いや。犯人解つたし。」

俺が言うと、容疑を掛けられた5人の方々は、驚いた様子でこっちを見た。

「君、妹を殺した犯人が解つたって、本当かー?」

浅間が言い寄る。

「浅間さん、話しますから落ちついて下さい。」

そう言って、俺は浅間を落ちつかせた。

「黒田さん、一つ聞きますが、口論の理由は何ですか?」

「それは、やり直そうと話を持ちかけたら、口論になつただけだ。だ、だからって、俺は殺してないぞ!」

黒田は怒鳴った。

「解っています・・・。

狩屋さん。元恋人と言つ事ですが、何か原因があつて別れたんですか?」

「それは、彼女が留学するつて言つんで、別れたんだ。何故そんな事?」

「いや、特に理由はありません。」

さて、本題に入りますが、小島さん。

神谷 霧子を殺害した動機は何ですか?」

容疑者全員、小島に顔を向ける。

「お、俺が殺したと言うのか?【冗談は顔だけにしてくれ。】俺は、やれやれ、と呟いた。

「小島さん、冗談で犯人にする訳、がありません。」

貴方が殺したんでしょ、神谷さんを・・・」

「面白い。俺が殺したと言つ証拠を見せてみろ。」

小島は余裕の顔で言った。

「証拠?」

「そんなものありません。」

「おいおい。」

呆れた顔をする桑田。

「何だ、証拠が無いんじや、俺を犯人にする事は出来ないな。」

小島は笑つて言つた。

「証拠はありませんが、あるんですよ・・・。貴方が犯人だと言うダイイングメッセージがね。」

「何！？」

「スペードのトランプ。被害者が握つていました。」

「それが何なんだ？」

「スペード、クラブ、ダイヤ、ハート。この四つにはそれぞれ意味があるんですよ。」

「意味？」

小島は首を傾げた？

「ハートは聖杯、ダイヤはお金、クラブは棍棒、スペードは剣・・・。これは、それぞれの職業を象徴しているんだ。」

聖杯は僧侶、お金は商人、棍棒は農民・・・そして、剣は軍人。つまり、軍人＝自衛隊で、犯人はあんただ。」

小島は脱力するかの様に膝を付いた。

「あいつが、あいつが悪いんだ！いつまで経つても金を返さないから！俺は、俺はああああ！」

小島は涙した。

「小島 隆、神谷 霧子殺害容疑で逮捕する。」

そう言って、桑田は手錠を出し、彼に掛けた。

「解決時間10分だ。」

桑田はそう言い残し、小島は連れて出口に向かつた。

「許さない・・・。」

浅間が低い声で呟く。

「うわああああ！」

浅間は叫ぶと、小島に突っ込んで行き、懐から包丁を出す。

「グサツ！」

「あつ・・・ああ・・・あ。」

小島の背中から血がポタポタ垂れる。

「浅間さん、何て事を！？」

俺は驚いた。

「お前の所為で、お前の所為で俺の妹は！」

浅間はそう叫んだ。

小島は脱力し、バタツ、と音を立てて前に倒れた。

「妹が受けた苦しみ・・・お前も味わえ！」

浅間は小島に向かつて叫んだ。

「あ・・・あ・・・さ・・・ま・・・。」

小島はそう言い残すと、息を引き取つた。

桑田は手錠を取りだした。

「浅間 拓也。小島 隆殺害の現行犯で逮捕する。」

「カシヤ！」

桑田は浅間に手錠を・・・いや、自分の手に手錠を掛けてしまった。

「な、何で！？」

「浅間さんが手を引いたからだよ。」

俺は呟いた。

「こんな所で捕まる訳にはいかない！」

そう叫んだ浅間は、真理絵を人質に取つた。

「一步でも動いてみる。この女の命は無いぜ。」

そう言つて、浅間はナイフを、真理絵の首に当てた。

「バカ・・・。」

俺は呟いた。

「己、女の子を人質に取るとは…」

桑田は叫んだ。

「浅間、直ぐにその子を解放するんだ！」

桑田は怒鳴つた。

「その必要は無い。」

俺は桑田に言った。

「何故だ！？放つておいたら、彼女死んでしまうぞー。」

「いや、死ぬのは浅間だ。良く見てろ。」

桑田は、浅間を凝視する。

「やれ。」

俺は真理絵に言つ。

真理絵は、浅間にの腹に、肘パンチをくれてやつた。

「がはっ！？」

浅間は口から血を吐き、ナイフを落として氣絶し、真理絵に寄りかかる。

真理絵は微笑むとこつ言つた。

「眠つてるだけだから安心して。」

こうして、浅間は逮捕され、事件は幕を降ろした。

にしても、真理絵つて、本当に人間か？

疑問を抱く俺であった。

第6話・スピードは語る（解決編）（後書き）

やべ、ついついサイボーグの乗りで書いてしまった。
まあ、設定上はサイボーグとリンクするから問題無いけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7468a/>

黒崎新一の推理日誌

2010年10月8日15時34分発行